

実践的AI活用の最前線を知る!

～最新動向、活用事例、導入支援までを一挙公開～



SOLUTION



Report

生成AIの活用を加速させる企業インフラの最適解は?

生成 AI の活用が進む中、企業における導入戦略やインフラの最適化が重要視されています。本イベントでは、neoAI の業務アシスタント活用、HPE のオンプレミス AI インフラ、TD SYNNEX のクラウド提案、エクイニクスの液体冷却データセンターなど、AI 活用に必要なソリューションが紹介され、各社の最新技術や導入事例を通じて、企業が AI を効果的に運用するためのポイントが議論されました。本レポートでは、その詳細をご紹介します。

オープニングセッション

ご挨拶・最新AI動向、TD SYNNEXのDestination AIについて

▶ 講演者 TD SYNNEX株式会社 アドバンスドソリューション部門 Data & AI エンジニアリング部 ソリューションアーキテクト 鶴野 龍一郎 氏

Destination AIを通して 企業のAI最大限活用を支援

まずは、オープニングセッションとして TD SYNNEX の鶴野氏が、AI 技術の最新動向について解説し、特に AI エージェントの進化が業務効率化に与える影響を強調しました。「AI エージェント技術の発展により、AI は自律的な情報収集や統合が可能になり、個人のリサーチ作業を大幅に効率化できます。今年は“AI エージェント元年”とも言われており、今後の進化に期待が高まっています」(鶴野氏)

さらに、法規制の整備が進む中、企業は AI 活用の安全性を確保する必要があると指摘。TD SYNNEX では「Dart(ダート)」プログラムを活用し、社内の AI ポリシーに基づいた製品選定を行い、安全な運用を推進しています。「AI が広く利用されるようになると、セキュリティや法的な問題への対応が不可欠になります。我々は、社内に AI ポリシーを設け、適切な製品の選定と管理を進めています」(鶴野氏)

マルチモーダル AI についても触れられ、Google の開発事例を交えながら、映像や音声をリアルタイムで処理し、AI との直感的な対話が可能になる未来像が示されました。

「例えば、機械の修理時にマニュアルを探す手間をなくし、AI とリアルタイムでやり取りしながら適切な修理方法を提示できる技術が進化しています」(鶴野氏)

また、AI 活用の専用ハードウェアの重要性にも言及。OpenAI の「io」買収を例に、AI を搭載したデバイスが今後ますます増えていく可能性を示唆しました。

「これまで AI はソフトウェア中心でしたが、今後はハードウェアを含めた AI 環境の構築が重要になります。AI の機能が組み込まれたデバイスが、ビジネスの現場でも活用されるようになるでしょう」(鶴野氏)

最後に、TD SYNNEX が提供する「Destination AI」フレームワークが紹介され、企業が AI 導入をよりスマートに進められるよう支援する取り組みを説明しました。

「Destination AI は、認知度向上から販売後



のサポートまで、企業が AI を最大限活用できるための包括的なフレームワークです。これにより、企業の成長戦略の一環として AI を位置付けることが可能になります」(鶴野氏)

ご挨拶・最新AI動向、TD SYNNEXの
Destination AIについて

資料ダウンロードはこちら



セッション 1

次の世代のAI産業を創る

▶ 講演者 株式会社neoAI 取締役CCO & Co-founder 寺澤 混士良 氏

企業向け生成AI導入のポイントと実践事例

最初のセッションでは neoAI の寺澤氏が登壇し、企業における生成 AI 導入のポイントについて講演を行いました。

まずは生成 AI における現状の活用について「生成 AI は、単なるテキスト生成だけでなく、社内業務の効率化やデータ活用の幅を広げるものです。特に、業務と紐付けた形で導入することで、アシスタント機能を活用しやすくなります」と寺澤氏は話します。

neoAI は東京大学・松尾研究室発のスタートアップとして創業した企業であり、金融・電力・紙媒体の業務を中心に導入を進め、特に社内 FAQ や業務アシスタントとしての活用に焦点を当てています。最近では、生成 AI に指示を与え、複数回の回答を統合して業務の意思決定をサポートする「エージェント技術」に注目が集まっています。

「AI は単に質問の回答を返すだけでなく、業務を補助する段階から、AI が業務を処理し人間がレビューする形へと移行していくと考えています」(寺澤氏)

この流れの中で、neoAI は「アシスタント技術」を軸に、社内業務に適応する生成 AI プロダクト「neoAI Chat」を開発。PDF や Office 系のファイルのアップロード機能を備え、社内データとの連携による業務効率化を実現しています。

「通常の ChatGPT では要約や翻訳は可能ですが、業務での活用にはデータのアップロードや連携が欠かせません。neoAI では Box や

SharePoint といった既存のシステムとの自動連携をサポートしています」(寺澤氏)

また、アシスタントの挙動を定義する「カスタム指示」機能を提供し、業務ごとに AI の回答精度を調整できる仕様となっています。これにより、企業内のナレッジを AI アシスタントへ統合し、情報検索や業務支援を強化することが可能です。

導入事例として、城南信用金庫では社内マニュアル検索や営業支援に活用され、補助金情報の検索機能を通じて業務の効率化を図っています。

「例えば、補助金の検索では、締切日が過ぎていない補助金の一覧を AI が提示し、担当者の負担を軽減します」(寺澤氏)

同様に、某電力会社では社用スマホ利用に関する FAQ 対応を AI アシスタントで実装。過去の応対履歴をアップロードすることで、手間をかけずに即時運用できる仕組みを整えています。

「ポータルサイトに埋め込むことでログイン不要でアクセス可能な設計となっており、業務の効率化とコスト削減を同時に実現しています」(寺澤氏)

また、企業のセキュリティ要件に対応するため、閉域ネットワーク接続や専用サーバー環境での導入プランを提供。特に金融業界向けには、セキュリティポリシーに準拠したシステム構築をサポートしています。

最後に、neoAI のソリューション事業について説明があり、プロジェクト型の AI 活用支援やカスタマイズ開発の事例が紹介されました。

「SaaS 型のソリューションでは一定の課題解決が可能ですが、企業ごとの業務に応じたカスタ



マイズ開発が必要となるケースがあります。neoAI はエンジニアの強みを活かし、企業ごとのニーズに最適化した形でソリューションを提供しています」(寺澤氏)

事例として、某電力会社における工事資料作成業務の効率化を支援し、AI ワークフローを構築することで、複数のファイルを一括生成できる環境を整えたことが挙げられました。

「チャットベースの独自 UI を用いたワークフローを実装し、必要な項目を入力するだけで、10 以上のファイルを一気に生成できます」(寺澤氏)

生成 AI の導入が進む中、業務アシスタントの活用やデータ連携、カスタマイズ可能なソリューション提供が、企業にとって重要な要素となっていることが強調されました。

次の世代のAI産業を創る
資料ダウンロードはこちら



セッション 2

生成AIを支えるインフラの重要性とHPEのソリューション

▶ 講演者 日本ヒューレット・パッカード合同会社 ハイブリッドソリューションズ事業統括本部 ビジネス開発部長 小川 大地 氏

HPEの先進技術と AIの融合による業務効率化に 向けた戦略的アプローチ

次のセッションでは、日本ヒューレット・パッカードの小川氏が登壇し、生成 AI を支えるインフラの重要性と同社のソリューションについて解説しました。

まず小川氏は AI 利用における現状について、

「AI の普及が進み、現在ではチャットボットやコールセンターの効率化、製造業のラインシミュレーションなど、さまざまな分野で AI が活用されています。そして、現在は AI を作る側と使う側に二極化しています。HPE はその両方に対応する製品を提供しています」と述べました。

HPE では ProLiant Compute シリーズの第 12 世代を展開し、最新の NVIDIA 製 GPU と最新 CPU を搭載。液冷対応の設計で高性能



GPU の発熱への対策を講じており、効率的な AI 運用を可能にしています。

次に小川氏は、AI 環境特有の課題として、從

来の IT インフラで標準的な冗長化や可用性対策が十分に考慮されていない点を指摘しました。

「一般的な IT インフラでは、冗長化や可用性、クラスタリングといった対策が標準的に行われています。しかし、AI 環境では十分に考慮されていないことが大きな課題です。極端な話をすれば、電源コードが抜けた瞬間にその AI エージェントは機能しなくなってしまいます」(小川氏)

その解決策として、サーバー仮想化の概念を AI 環境に応用し、複数のサーバーを冗長化してクラスタリングすることで、リソースプール化による柔軟な運用が可能になることが説明されました。

また、エンタープライズ企業では、セキュリティ要件からオンプレミス環境を選択するケースが増加していることにも触れました。

「RAG(検索拡張生成)の技術を使う場合、既存の LLM(大規模言語モデル)に自社のオペレーションマニュアルや社外秘の情報を読み込ませることができます。しかし、その情報をインターネットやクラウド上に公開するが可能なのかどうかが、多くのお客様から懸念されている点です」(小川氏)

こうした市場ニーズに対応するため、HPE では NVIDIA との共同開発により「HPE Private Cloud AI」を開発しました。このソリューションは、オンプレミス環境でありながらクラウドのような利便性を提供します。

「オンプレミスに置くことで、機密データを適切に確保できるほか、予算管理がしやすく、GPU を好きなだけ使っても過剰に課金されることがないというメリットがあります」(小川氏)

通常 AI プラットフォームの構築には約 6 ヶ月が必要ですが、HPE Private Cloud AI では機器到着後、電源を入れるだけで 1 日で完了します。Kubernetes などの管理ツール、ワークフロー管理ツール、RAG サポートツールなど、複雑なソフトウェアスタックを標準でインストール済みの状態で提供し、セットアップの負担を大幅に軽減しています。

HPE Private Cloud AI は 2025 年 2 月に販売開始され、すでに国内外で導入実績が増えており、日本国内でも大手 SIer が導入を進めています。管理面では「HPE GreenLake Cloud」により、クラウドポータルからログインし、ユーザー管理のみをインターネット SaaS で提供。実際のデータはオンプレミス環境に

配置する仕組みとなっています。

「これまでの販売実績を見ると、多くのお客様が AI アプリに合わせてサーバー 1 台を購入しているケースが多いです。しかし、本格的な AI 運用となると、故障リスクが発生します。これらの課題を解決するために、サーバー仮想化と同じ発想で AI のプラットフォーム化を進めることができます」(小川氏)

HPE は従来のハードウェア企業のイメージを超えて、ソフトウェアソリューションの強化を図っており、エンタープライズ AI の本格普及に向けて、冗長化とコスト最適化を両立するプラットフォームソリューションの重要性が今後ますます高まることが予想されます。

生成AIを支えるインフラの重要性と HPEのソリューション

資料ダウンロードはこちら



セッション 3 AIの未来を支えるEQUINIXソリューション

▶ 講演者 エクイニクス・ジャパン株式会社 グローバル・テクニカル・セールス本部 シニアソリューションアーキテクト 井原 健 氏

HPEとエクイニクスの協業による 最適なAIソリューション — 高度な冷却技術と クラウド連携の可能性

エクイニクス・ジャパンの井原氏が登壇し、AI インフラ構築における同社のソリューションについて詳細な解説を行いました。まずは井原氏がエクイニクスの事業概要を説明しました。

「エクイニクスはグローバルなデジタルインフラストラクチャー企業です。データセンターを軸とし、データセンター内のお客様同士をつなぐことで、ビジネスを拡大できるプラットフォームを提供しています」(井原氏)

現在、エクイニクスは 35 カ国で 270 のデータセンターを運営しており、ネットワークキャリア、クラウドサービスプロバイダー、金融業界や製造業の企業などが同社環境を利用しています。特に注目すべき点として、パブリッククラウド事業者がサービスの入口・出口の

ネットワークを世界中のエクイニクスデータセンターに設置していることが挙げられます。これにより、企業がエクイニクスにアクセスすると、数分で AWS や Azure などのパブリッククラウドと相互接続できる環境が実現されています。

AI インフラ構築においてエクイニクスが蓄積してきたノウハウから、井原氏は 2 つの重要なポイントを提示しました。

1 つ目のポイントは「柔軟な相互接続」の必要性です。AI には「トレーニング(学習)」と「推論(実際の利用)」の 2 つのフェーズがありますが、最も重要なのはデータの扱いです。AI モデルの精度は使用するデータの質と多様性によって大きく左右されるため、自社データのみならず、グローバルに収集したデータ、公開データ、パートナー提供データ、購入データなど、さまざまなデータを活用することが求められます。

「こうした状況では、データをどのように連携させるのか、どうやって収集するのかが課題となります。一番簡単な方法としてはイン



ターネットの利用が考えられますが、企業でこういったデータを扱う場合、インターネット経由ではセキュリティ面で課題が生じることが多いです」(井原氏)

専用線を使用する場合、高額なコストと長いリードタイム(3~6 か月、場合によっては 1 年)が必要となり、現実的ではありません。そのため、企業が集まる環境で相互接続ができ、簡単にデータを連携できる場が求められています。

2 つ目のポイントは「強力なハードウェア」と「高度な冷却機能」です。特化型 AI や軽量な AI を構築する際、最新の CPU や GPU の処理能力向上に伴い、消費電力も劇的に増加しています。

「最新の GB200 では、1 枚あたり約 800W が必要とされる状況になっています。これをデータセンターのラックに設置する場合、1 ラックあたりの消費電力は軽く 20KW、場合によっては 3 万 W から 4 万 W にも達するような環境が現実となっています」(井原氏)
このような高い消費電力に対応するため、従来の空冷システムでは限界があり、CPU や GPU ベンダーは水冷を前提とした設計へと移行しています。データセンター業界も「相互接続型データセンター」と「ハイパースケール型データセンター」の 2 つに分類され、AI 登場により新たな変化が生じています。

実際の導入事例として、セガサミーグループとオリンパスの 2 社が紹介されました。セガサミーグループのセガ フェイブ Toys カンパニーでは、自社データと生成 AI を組み合わせた商品開発の業務効率化を実現し、画像を用いたデザイン案作成において従来の 100 倍の量のデザイン生成が可能となりました。また、生成 AI を活用したアンケート分析

では処理時間を 80% 短縮できたという成果が報告されています。

オリンパスでは、HPC(ハイパフォーマンスコンピュータ)をオンプレミス環境で利用しながらパブリッククラウドとの連携を実現し、AI を活用した最適なスケーラブルなインフラを確保しています。

これらの要件を満たすソリューションとして、エクイニクスは「Equinix Fabric」と高度な冷却機能を備えたデータセンターサービスを提供しています。Equinix Fabric は Software-Defined の相互接続サービスで、エクイニクスのサービスポータルから数回のクリックで 1~2 分以内に AWS や Azure などの主要パブリッククラウドサービスと接続可能です。

高度な冷却機能については、昨年 9 月に開設された品川の「IBX® データセンター」が紹介されました。このデータセンターは最新の GPU や CPU を効率的に冷却できる水冷システムを前提とした設備を備えており、サー

バーム内に水道管が設置されている点が従来のデータセンターとの大きな違いとして説明されました。

最後に井原氏は、エクイニクスには HPE の「グリーンレイク プライベートクラウド AI」との共同ソリューションをはじめ、さまざまな AI 向けソリューションが用意されていることを紹介し、お客様の状況に合わせた AI ソリューションのインフラ面からのサポート提供を示しました。

AIの未来を支える
EQUINIXソリューション
資料ダウンロードはこちら



クロージングセッション

“実践的AI活用の最前線を知る!” TD SYNEXからのご支援

▶ 講演者 TD SYNEX株式会社 ハイブリッドクラウドPM本部 野村 由貴 氏

TD SYNEXとエクイニクスによる支援でAI活用を促進

最後のセッションでは、TD SYNEX の野村氏が登壇し、同社の AI 活用の取り組みとパートナー支援について説明しました。
「社内では AI 活用のガイドラインを定める Dart チームを設置し、透明性のある運用を推進しています。承認されたツールのみ業務利用が可能です」(野村氏)

TD SYNEX では、社内用 AI アシスタント「LARA (Language-Aware & Responsive AI)」や、Microsoft Cloud 向けの「MAE Assist」などを開発・提供。加えて、パートナー企業向けには「Destination AI」プログラムを通じ、AI 提案を支援しています。
エクイニクスのソリューションについても紹介され、AI 向けサーバー環境における電力・冷

却課題の解決策が説明されました。

「AI 運用には高い電力消費と発熱対策が必須です。エクイニクスのデータセンターでは液体冷却システムを採用し、適切な運用環境を提供しています」(野村氏)

TD SYNEX は、neoAI の AI ソリューション、HPE のインフラ、エクイニクスのデータセンターを統合した支援が可能であり、最適な AI 活用モデルの提案を行っています。

「AI 導入には用途や社内ポリシーに応じた選択が必要です。クラウド型・オンプレミス型の双方に対応した支援を提供しています」(野村氏)

また、HPC や PoC 環境の提供にも対応し、技術支援を組み合わせたトータルソリューションを開拓していることが強調されました。

「AI 導入を成功させるために、TD SYNEX は多面的な支援を提供し、お客様の目的達成をサポートします」(野村氏)



“実践的AI活用の最前線を知る!”
TD SYNEXからのご支援

資料ダウンロードはこちら



●お問合せ・お見積りは下記までお願い致します。

Desination AIチーム Email: jp-desination.ai@tdsynnex.com



TD SYNEX 株式会社

※掲載されている社名又は製品名は、各社の商標又は登録商標です。
©2025 TD SYNEX K.K.